



子育てチャンネル

子育て支援、という前に

平成23年3月11日。あの日、私は札幌で仕事をしていました。大きな地震であることはすぐわかったが、故郷の福島がその後いかなる運命に遭遇するのかまだ知るよしもなかった。

当時、私にはまだ1歳の誕生日を迎える前の小さな娘がいた。妻が育休から復帰し、娘は保育園という小さな社会に出る。門出の春に起こった出来事だった。

震災の4日後、そんな娘に従兄弟ができた。計画停電など震災の影響で混乱する東京で生まれた。私は水や蝋燭などありったけの物資を東京に届けた。同時代を生きることになる2つの命は、そのスタート時点から過酷な歴史の1ページをくぐり抜けていった。

縁あってこの土地で言語聴覚士という仕事をさせて

いただいている。初めて聞いた方も多いと思う。言語聴覚士は医療機関で働き、成人のリハビリに携わっている者が多い。しかし私は迷わず子どもを自分のフィールドに選んだ。

子どもはかわい
い。同時に子
どもを育て
ることは
波乱の連
続でもあ
る。一人
ひとり気質
や個性が違い、
突然何が起るか
も分からない。五感を研ぎ
澄まし、アンテナをフルに
働かせていないと子どもの
メッセージは読み取れない。
子どもと係わることは、か
つて子どもだった自分と向
き合うことでもある。自分
は大人に何をどのように受



け止めてもらいたかっただ
ろうか。言葉を扱う仕事で
あるが、言葉にならない言
葉の方が常に重みがある。
子育てで「いつ何が起
るか分からない」という感
覚は、自然と向き合うとき
の緊張感に少し似
ている。大人
が小さい頭
であれこ
れと思
いを巡らし
策を講じ
てみても、
太刀打ちでき
ないほどの圧倒的
なエネルギーで真正面から
迫ってくる。あの震災でも
津波から直感的に危険を察
知して逃げた人々がいた。

本能的な直観力や、昔から
の知恵といったものはその
まま子育てにおいても欠か
せない。頭ではなく体全体

を使って子どもが発する工
ネルギーを感じながら、そ
のわずかな変化に気付くと
いうこと。極言すれば、自
然の摂理や万物の法則に素
直になるということでもあ
るだろう。主体が大人に
すり替わった瞬間に子ども
は必ずそれを感じ取る。大
人が物理法則を自在に操る
ことができたはずの原発は、
もはや制御不能で福島の子
どもたちを追い詰めた。

あの年に生まれた2つの
命は少しずつ大きくなり、
周囲を明るく照らしている。
子どもとは何だろうか。発
達とは何だろうか。「子育
て支援」を叫ぶ前に、今一
度そのことを問い直してみ
たい。

東神楽町子ども発達支援セン
ターおひさま教室
言語聴覚士

熊田 広樹